續俳家奇人談　上

911.3
ゾ
上

天保壬辰秋鐫

蓮廬青々山人著
八朶園寥松老人補校

續俳家奇人談

嵩山房
衡山堂

此書ハ往古より近代の俳諧法名家并に蓼太白雄闌更暁台存義等に至るまで一人としてその流のなくその伝を詳にして著し奇といふべき俳諧銭あるハ且夜半翁の画かれたる蕉門十哲の像并発句其外古人俳家の書画縮図をも加へて載られハ風流の君子必す座右ニなくてハならざる随筆也

叙言

縉紳竹窓主人一おのづからめぐるちかきころ道の士
あまた家の奇行なるを書集めたるものを其ハ子
信伴山人の刊行あるおもひ同じ門のあつかる
畸人の影写を働しく俳家奇人譚と名付く
るもの編せし文明の頃の諸名家よりやうやう享保あたりの
風流士の事をかきて其ハ譚おのおの一席をなして
すこぶる綺説の趣を形とせしもの是をもて尽さる
宗匠なる所地屋にてわかちある然るにいまだ次道

あるとき俳諧する人あまたあつまりて徳律といふ事を語りて
に筆をとりておもしろき俳諧集をつくりてよとありぬ
されば其はおもしろかりなんけれどたやすからず
此事いふはよろしく探きわたりて書にて集むべき
上梓せん事をおもひめあまた編に分ち序あるはあつめやらん
其の中にもかの件のあやしきを録せるもの
漂るへきにもあるまじといふ略を付けしてこなたを
出ありきみるに古歌のうちいくつも増しぬるもあまた

其編の中には白雄が葉の初めの二譚はおのおのにて
しるしおきたる事なりつぎておのれ話をも書補ひつ
此度此編の外にもあまた出ぬれば世にそのあら
此三編の事を出さんにつけて筆の力を知りて載はし
ものと先に二編の世におこなはれしなどを補ふにあたり
よりていふ事になしぬ

大年庵八朶

續俳家奇人談總目錄

上卷

一宗長法師　一肖柏法師
一末吉道節　一馬淵宗畔
一宮河松堅　一藤谷貞兼
一乾貞恕　一吟花堂晩山
一堀江林鴻　一岸本調和
一志村無倫　一大野秀和
一高井立志　一溝口竹亭

一高村和及　一四時堂其諺
一五井塘雨　一山本子英
一井阪春清　一田氏捨女 附盤桂禪師
一松倉嵐蘭　一岡村不卜

中卷

一宮司能順　一木因坊
一天野桃隣 附瀬尾桃翁　一逸人二川
一風士梅貞　一瀧方山
一小澤卜尺　一無腸處士
一竹下東順　一從者吼雲
一騷客凡兆　一雅人杜國
一山本荷兮　一宮崎荊口 附此筋 千川
一髻翁木節　一僧李由
一磨工牧童　一瓢水居士
一白馬散人　一稲津祇空
一長谷部柳居　一大雅堂 附妻玉瀾
一泉石老人

下卷

一 白井鳥醉　一 山口黑路
一 紫子春來　一 慶紀逸
一 俳宗祇德　一 西島妻
一 皐月平砂　一 中村敲石
一 越谷吾山　一 龍門曉臺
一 吾竹坊　一 玄武坊
一 谷口蕪村　一 闌更居士
一 渡邊岱青　一 井上士朗
一 川上不白　一 寺町百菴
一 馬場存義　一 春秋庵白雄
一 大島蓼太

通計六十有六談

烏帽子やき
ゑほしきて
みそりふれ
月

其角

山村蔵

立出てうしろ
あゆみや秋の暮

嵐雪

片枝に脈や
かよひて梅の
花

東花坊

欄折に出てや
菜の日影はし

許六

木枯乃地にも
落さぬし
ぐれ哉

去来

飛込と
まくり都の
時鳥

丈草

武陀の垣の
結めやたろーし
それ

野坡

散時は心やすさよ
罌粟の花

越人

ゆふ風に伸
あけてたまる月

北枝

海山の鳥啼たつる霞哉　抱風

鳳凰郡於東山雅他芭蕉

附言

一 道に古今の変ありて俳諧も亦去りとては此去秋編ありし續きて古人蕉翁風雅をも慕ひ偶〻ばん人もすくなからずらんだ古より遡りて後今の俳子をとかるべし温古知新乃そこにもかくるとや

一 前編ゆゑありて延引し先人の寂後甚に忍びしく卒ま世にあらはれし田氏捨子の一稿を漏せり今これを加へぬはた大雅堂の事は近世畸人伝に載りといへども今猶在はる老人佐生謝寺石の物語れるに俳諧の風流をあらはしひろく其支の缺たるを補ふ

一 家に撰び集る所はあまねく古俳客の随筆雑記句集の類又他書にあぐる俳諧その伝聞の正しきは其家〻に就て云

記しおくといふ事なし　猶古き画を模写せしめ是を考へ
加ふる事もしかり　本文を助んと絵するのみなれば見ん人これ
をおもひ給へ

蓬庵閑人書しるす

續俳家奇人談巻上

故句當　竹内玄玄一遺編

宗長法師

宗長法師ハ駿河國嶋田驛の鍛冶何某が子也　国司今川義忠
其幼にして才あるを愛し左右に勤仕せしむ　義忠事ありし
年ある時宗祇に謁し連歌の事を問ふに一を聞て
十を悟る　遂に出家して名を改め驛中に草庵を結びし
十八はじめ法を嘗捨院に伴ひ後に紫野一休和尚に
参禅ありといふ　明応中師前勅を受て新撰菟玖波集をえら
ばるに法師此連歌廿八句をのせるといづれの比にや
行脚して伊勢國[illegible]北庵といふ所に宿る庭中乃立
花盛りけれバ「立花乃かゝりせすられて尋ね[illegible]

師没して後同遊打寄て天下苑の本は宗匠たるべしと勧め
けるに思ひも寄ねる事と一向に承合ねば皆いひて奏聞をせ
げるに庵号くれて其跡を預かるべしと仰を下給ひて名誉
なりければ武とし紫野大徳寺修理法堂ありけれ成
長も其珠庵と遠近なるに山門いまだ成らざる処に於いて
其修理の費の一を助んと己が秘蔵する定家真筆け
氏物語を鬻て六十貫文を寄附せしも正永元年今
門家の被官就岌安元その居を泉谷に移さしむ栄庵
と自号しに庭前に山谷彼是座りて四時の興浅からず
口号「山桜ははりふ色そふ霞かな翌年幾千世も志がれと
葉をうつ竹を植て「幾若紫に座し初花の窓は竹をう
かる貴人の駕を柾て附合ありし其冠頭の句とは成ふくる

大永の末九年其竹を杖にきりて今川君に奉るとておのが
も八十と世の齢なれば和や「おの杖は旅よりあらんとて君と我
八十路の坂をこゆるためしさ竹は一節切を吹て古端は
ありをまつく古竹をとりてあそびて平生の楽みとはなし
より時に享禄元年二月八十六歳にして物故せり世俗
連歌の蘊奥を極てなきものあるが中に「手もたゆく
荒き鳴門を漕ぐとて」といふ句に「ゆくを立あへる扇の
了悟おもへと附句しより接ぎるに古今の意なり大舟の
ゆくのたゆくとよめり新撰集にゆくを立よりも志げき渡城
と云るは法師が附ばやに依て附る事知べしゆくとは舟の
阿加のふとふみく涌文字也べきにや附録に委しく記遊ばし古人も
聞ゆる其の広かれは来由ありき事葉はいとも附ることや

肖柏法師

肖柏法師は昌平親王の末孫にして自然斎宗祇より和歌連哥の道統をうけてみづから牡丹花と称し時に心敬宗祇の両僧世にありて毎会争論たへざりしより文亀二年勅を蒙りて両の新式今案を述して其法をたゞさひ連俳此後宗とす是によりていふなりし「花咲ぬものの出るや涼風草に通へば連俳は牡丹を初夏にいざまなひを是古の叟が發明なりとて旅すとも襟理法會十六夜より舞り出て「宗に宿りてん秋や幾世秋の月武年寄して「宗祇の和るやるとのぞみの秋の宗と世の人只に其角の句のこをとやなへて肖柏ありしを志しなる旅囘法師の雨宛のるまなづるり 附録ニ委し 老ニ垂として摂の池田にかくる其居家

夢庵と名く庭中に四時の草花を植て其軒に號しく弄花ともいへり性酒を好み花を愛し香を好しむ此道を三愛とて自の紀あり後ゆゑありて泉南に移る大永七年四月四日八十五歳にて死せり南嶺子がいふ光のとしみ老人の遺言とて秘事は書く蔵したる者出袋にいへるを見るに巻末に四月廿日死はとありしが此牡丹をの名残をかりて偽作をとふものなるべしと

来吉道節

来吉道節は津の国平野の人なり貞つかに入りて俳諧の上手なりある時「寛しわしバ雪女かやなうかりで彼成新僧ねのをより雪女なり替なしたる御きたのふべし此道ハ是より名うてのその原節とハ称せられたり寛永の比江戸より来て

志づかに住れど不運にして用ひられざれば折ふしの独吟に懽
りて家財を失ひ年の暮にせまりて都へ帰る時に
先因なり「究竟ハみのとしいきふわすれさせしが迎なく
身の上此時ハなりけり時に享保三年之

馬渕宗畔

馬渕宗畔初名重治京都にして人と成て正直にして
性に涼しく生て忠誠之道時に行ひあはせて俳諧の点料談支
一両之けるが貞徳に倣ひて云く其道紹巴連歌の点
料廿四字を定めとせしが此も今より沈軸を銀軸に替
さまへと改む是り依て銀壱両の料に定むるとし立圃
も清く例を返て銀壱両を定る畔まさ此に此圃流を記
ろくれ出て又一銭目ましたまへと以後遂に大銭目とハなりけれ
り世の残酷京都にはかしましく知べし「深染けく花野や
移は枯枝四「七賢が植けむ花ぞ藪つゞき享保四年乃
春風呂に入りて中風おこり遂に黄泉の客とハなりぬ

宮河松堅

宮河正由ハ道柯居士と称し京大仏堂の南先に貞徳の門弟
に家ありて樹墨庵の号あり後松堅と改名せり「若葉
に前らす浮折りくは「洗濯の盥此月も清まし物哉の濫
雅なりと見るべし始め幼き時此に独はいたふ独子句あり
や答へいかく有ば「陸のみじに咲く桜新や垣の本此いざよふ
ひとく弟子とまた後世の世を辞は是の時としりゝ歴く
二十本漸之より志さうびくを伝習は素より和
家をよく嘯く法會に門人多しといふ業を

のぞみなく穢世のうさを云むとはるに飢あるとあさいく人をし
て料紙をとりよせしめ筆がら筆を拈て認て云く「浮り
まで筆を談らひ行年に数々よりも我ぞ任りなれ如く
を捨て忽ち瞑ぐ時ナリ享保十一年二月廿三日夜なり

藤谷貞兼

藤谷貞兼は山崎の人後に高貴の諱を避て貞蓋と改めり
自ら植菊と称し作雲軒と号す「田植しやや白ひを拾ふ
宝の中「秋九日のいとくしさ蕎の花いと世人を令徳が門
子なりて貞の字を犯に辺まへあれど深く家に於て令徳
遊引して其徳に見えしむ元禄十四年十月死す世を辞す
る句「月ハみこぼさりや二十四来迎

乾貞恕

乾貞恕ハ越の敦賀の人いづれの年にや江州大津に来りて住
てより貞室の門庭に入れり「秋香や涼山わうしきさぬ
ちぬ一年ある人の「おそくハゆうし今わの旅人とのくむす
「たばこハいきり立つる馬の轟を附句して大津の名乃
くそとりふ渾名を得たるハ後を抱て笑ふに堪まり一說に
宝がの子ありしこいとも語伝ゆづるべき者なし其の人
花の本を許しとぞ

吟花堂暁山

暁山ハ京師の人也家ハ祖白昌陽父子に交りて風流にあそ
らうし俳諧ハ松嶺より得て吟花の二字をとりて堂号とせり
「泣つやや十日の菊れ隣付ぬ「うき中との遊く来る
なり秋の蝶「赤うして花の名さや唐がらし「新絹や泊る

治代の号れいおく此人殊ニ手柄の誹ありしハ俳諧山吉扉ニて
答へし狼物語といへるハよく愛助が戯りを解きて明ふ
しらる志ハえすこ據ありさ其比の紀刊ともなるべし世俗
右时の吟「世すつて居や身ハならハせの草臥法の

堀江林鴻

堀江林鴻ハ似船の門人ニてうち風雲子と称し烟月堂と号し
「降るしく花のちらむかきつばた」あらけなく見れバいふ
永く俳諧家譜ニいふ鴻か集る所の京羽二重を見るに其
比一时の俳家ニ年先を加へて出れを採せり唯陸海の名を
列ねることを恋し夜ハ永代記をあらハしく鴻を識るその云
紫に宋明二代ニ輝ける林鴻の徳それをおのれに比るに過ぎたり
と出れも此子宋の林学士を慕ひ堂号をそこかの湧金门

に酒酔る詩より思ひられバく

岸本調和

岸本調和ハ石見の人にして安静ニ門なびて壷瓢軒と号し
後に去來ともいふ寛永の比江戸呉服町ニ来り住り「書凡目
や達广大はも尻りぶし「錦繍や伊勢男の蛍の拾ぢる「瑶
あそびぞ夜の猪うさん「堰悪の二字や上あとの菜嫁と正徹
大年此名あるまで草といふ名を綴りたし「吉の一句底依判
なし本からし世をに降さく時わかなりて死せり

志村無倫　附倫里　来门

志村無倫ハ越後國の人江戸に出て吟叟の門裏にありて拾紫斎
後に雪堂とも號し「むかし世にありし萩か花一包まれ
て水文のびる蓮かな　或ハ拝彼か句と此ホ如何是一　享保二年二月死し辞世「此ハ

雪月荘一 神鏡々 無倫

白尘一 清茂亦

不知庵一 望月々

秀明二 朏五

長三●五

黄一 蓮一 鸝

童一 金菊一 贒

雪玉二 銀梅二

紫藤二 紅葉七

野梅

江南梅

東閣詩情

壽千昊

けらハ水より水へゆきかれたるその一人是立倫里治とつき積成
軒と称し倫里死して其子来川継で立川水軒と号し次に
いたりて其流さかんなり「花も穂も萬葉よりぞ恵みなる　倫里
「蓑も鍬む傍で一口かぢつきて　来川

大野秀和

大野秀和ハ江戸の人俳書を以しらく炭瓢斎と号し「獨居く
隣りなくしや窓の梅「小をとこに示けるしやや下部はじめ
何某侯に仕へて豪雄の武士なりしが当時浪人してもむかし
を忘れず惣髪にして大刀を帯せり過し頃其角が越りにて
己が事を嘲り笑へると聞て大ひに憤り居たるが折からある
両橋上にて不図ゆき逢ければ秀和声かけていふに汝其角かの
事と申せしはあれ奇怪なる若者に侮辱せまほしと刀に手の手

手をかけたり其角あきれて何る事申しられば汝是迄に思ふまじ
なくいで相手に孫猿人去ながら支度して暫く待れよと矢立
引あげて雪舟を腰に挟こいざ汝三なれといひ涼く跡をとも
見ばしらく詭出しけり秀和ハあまりれあきれ其興作者長述をば
しらく止ぬとなん一時の奇談といふべし

高井立志

高井氏ハ江戸の人先祖よりけふる誹諧に仕へさり已前ハ
始より仕假致しらく橋屋休甫（立甫門人）か家に客けれ誹諧を
あるがけて屋中より盛とし洛の立圃江戸へ来淋せよ弟子と
成らく立志といふその来記さ玄札とも供じけらく遂に誹
言を始より二の松架軒と号し和歌謹もいふ「縁天を
切換かる小米花「淀舟や喧嘩に中ずる郭公「芦は屋乃

石風腹ゝつきは
猫ゝ猫ゝ寸ゝ子ゝ　仁翁

求めえて
よろこひ
もなし
黒法ゝこ

萬屋得二所蔵
縮圖

こり〳〵ゆりこむ猿かな「我まさへ人臥ハあそびね火燵かな 寛永中に没ㇾし此僧げし京に推びし此圖れが「中〳〵小さきうりけりと採れ口とせるゆ「何ゆゑ日名残よ花衣とも附くるが遂に一巻と成りて秘ㇾ枝折と外宿ありこを小本ゆ其名大而其體小者立志法師と其小男なるも世ニ大名ゆゑしきと知らし

溝口竹亭

溝口竹亭ハ常矩の門人なりしが後に和及竹翁等を友としはしかれ逍行厨を携へて終日春その勝地ニ於ふ坐して吟し歩しくも詠じ時しゝて句ゆしけるハなし「掛網アリ尾鰭のはちり葉細工「燵子に傳ふ事よ己が好みてうき「冬の月紫蘇ときつるそ帳をあるる「年忘れ次のき落し〳〵喰りけり 元禄中に死去り葱のあ俳諧撰多巻ありて世に於ふ行るゝ今人乃知る所也

高村和及

高村和及ハ貞風を志して常矩を師とし洲と定ㇾ老に向んとする比洛西壬生村に幽棲し露吸庵西鶴法師と自号ㇾ「行あぞかりそや山なし子規「くどしくと二日になりね去年の更ㇾ「人恋しに尾のなき秋の夕べかな哀のまゝろを「長き夜や来ぬ人よりよむ鐘の数あらましの軒に「だびしやきみそれゆゑ二季おし芝凌「冬不凋春再回青」とゆる年文をよく云おあせていと愁ぐたし元禄四年に没ㇾ辞世「我としも四十四あん花乃あけくかな

四時堂其諺

之績ハ京師にあそびて玄水及山鞭石等と時を同ふしてつね
に交流(まじはり)四時堂(しじだう)と号す「芦田鶴(あしたづ)の水呑ゐる都かな」此外
の作には騒雅(さが)の道にならびなく殊に武(ぶ)の道にも達(たつ)せり
勢ひ山の上て其党(そのたう)をそしるとのも終(つゐ)に破門(はもん)にあひける
事ありし門人(もんじん)あざけりて是を怨(いろ)み弟子(いさ)を語れども居然(きよぜん)
としてみるかに其度量(そのどりやう)知ねなし其座右(ざいう)ゆゑしび置(おく)
ところの滑稽(こつけい)雑談(ざうだん)廿四巻四季(しき)の事実(じつ)を録(ろく)し其学(まなぐ)和漢(わかん)に
渉(わた)り古今(ここん)俳諧季寄(きよせ)是れも多(おほ)しといへども世の右に出る
者なしとはいふべからざれども知る人なきこと惜

五井塘雨

塘雨ハ京都の人号を五井(こせい)といふ俳諧(はいかい)ハ其様(そのやう)に見ゆるを知(しる)こと浅(あさ)し
性猿を好むの癖(くせ)ありて常(つね)に門戸(もんど)を閉(とざ)ししより遂(つゐ)に諸国(しよこく)

行脚(あんぎや)し紀(き)を著(あらは)して笈埃随筆(きうあいずゐひつ)十二巻と名(なづ)く俳客(はいかく)の日記(につき)其の書
より大なるハなく才学(さいがく)広く宏識(こうしき)之その記に少しも濫(わく)らず能(きのう)
ますく含ひ襟居(きんきよ)せしに老ハ作く俳のあるせ農民(のうみん)の辛苦(しんく)を
あくく其支を思ハばしんや彼季(かのきん)伸りからうさかりひ出る
「植しより田しうの行いま稲(いね)の露(つゆ)ますく云く杜鵑(ほとゝぎす)者初音(はつこゑ)ハ
甚よりはく空執(そらよりあかん)格別るさ「ほとゝぎすけれひもりけれ甚
鳴(なく)ハあらしぞ鳴まで初音(はつね)さくつる万葉(まんえふ)に秋郭公(あきほとゝぎす)と「時鳥(ほとゝぎす)
おもさく小野(をの)の秋風(あきかぜ)に萩(はぎ)咲ねはや夢(ゆめ)見しきと詠(よみ)を
引て「虫の音細(ほそ)し小萩が本(もと)のほとゝぎす

山本子英

山本子英ハ勢州松坂(せいしうまつさか)の人加友が門子之いづ述の中にも行里
けん江戸へ下て浅草あたりに隠居(かくきよ)をしが晩年(ばんねん)業(ぎふ)を知く本(もと)

応永に移りて正徳中に死せりと聞えたる句「白露や戸田
れはしりや杜宇「ありしなうしよく堂守れねるまゆゝよ
治涼のいふ白魚君白魚の須賀河驚鶴が一ノ木戸に入しより何
なるゆふや英がいなみしをかしく入句しるしも後あま也残
怨陽と聞え鶴りのつらく屋がて人々も残も死ぬるなりしハ
古人のうちも草紫れ陰すこく悦ぶべし「ご嘲く波が無今
鶴が風雅を感じらく此句を拾ふと丈驚鶴まの句残唱へて
治涼ほく其古を次ぐ発驚風雅れ実をつゝふるものとや
いはむ

井阪春清

井阪春清ハもと江戸の娼家に生る既に己が業をすてゝ醫術
変と作るハよけれ道ど幾程もなく次郎左衛門春清と名乗る
いかめしく武器をうばひて兵術の師なと自称し嘗らく
立圃に倣ひて頗る俳才あり「立帰人や草の根を舎む
嵐草一詩に此けるかの人の名や花俳を杏田宜時が萬句無行
の時巻頭よえらげ迄才三徳ぐと云ふりとうや後まさ醫
ども下ふたち哈り剃髪して名を玄孝と改め小八町堀に住して
折から俳道をも設けし義意四年の秋銀座町に別宅
をかまく井坂留雲翁と大ひなる標れを出し花笑を尽し
て奴婢多く抱へより俳を時行医の上手なりと一時
世の人も誰く金銀おのれが賭落より洒想を忘れてかし
けるにいひなしける夜つひにハ針ゆぶれて落ぶれて迷
よりやゝ老におよべる年れ暮に一句あられ行くしに浮むや
巷のもぐさなど述懐せしが程なく死去り

田氏捨女 附 盤珪禅師

捨子ハ丹波の國柏原田氏の女なり少小より風流のきこへし
既に六歳の冬「雪の朝二の字二の字の下駄の跡」これハ一年
庵となりしより「螢火にかしや捨かく露の玉」と
いへる詠たぐひなし夏もかはりし婚め季吟法師に從て和
歌をもよくし俳諧ハ友ありて後松陰によるといふ「雑莪く
や千代の数かく花ぐのか「うき中に割て雪百ハ嫁菜うれ
「日ぐ心やはてて重ても蓄る日紙身下のちろを「栗ハ植
やみハ数なりつね女家菜はうちの素宗族へ嫁しく後を
なく嬢となる後ち髪けづりて妙融といふ号ありし比陳
古錬をふりかびしそ老て盤珪禅師の法つに入れり志ゟし
より草庵を播州網干の里に結びて不徹庵と号ス元禄十二

年八月その地ニ寂ス歳六十六諡して嶺雲貞閑禅尼といふ
田氏にのこれる自詠に「秋風の吹来るかたに糸柳ちる
ほそくこそ哉ゆふべかな是薙髪の時の吟なるべし後の人
辞世とおもへる怨らくは非なるらむ
播磨の盤珪禅師ハ元禄年間の人にして其法徳世にかゞや
かり遷化の後勅せられて大法正眼国師と諡ス其の頃仏道
修行の便ならむとて臼挽歌廿一首を詠ぜられし今世にしる所
又俳句あり「此よ本ゟに示ス女さの露と是悟道発明
の一詠なるべし

松倉嵐蘭

松倉嵐蘭ハ板倉家の武吏一般君といはれて用ひられしが
遂に仕を致して浅草のほとりに匿る蕉門の風客なり「ほとく

と安くも立りつのらけ「あら猿えぬ花人の袂や相撲とり「小夜時雨降くけのる傘の音」「子や泣んことをしかも旅の宿人あれ萬葉の秋より続ふ大文字をうへて意足洞成尤為誹諧殘年月のくれに鎌倉に抛び帰洛病て殺せり蕉翁是がために建て作る其略はいちく金華を得て散じ撓まざるハ士の志し抛うた文質備ならざるとのく君子の功とし風葉ハ義を骨として実を腸にし老荘を魂にして風雅を肺肝の中にわそばしむ事とちかむるの十ありり九とせえけるが此三年バかりをおつつく宮を辞して立去老母を遊び稚子をほごしこしていまだ世波にてよふされども栄辱の界にく居るに立去し仲秋中の三日由井金沢の浪枕千月の添ふとて鎌倉に杖をひきとどむるさよりわち悪く立去かね

しき廿七日の夜七十年れ先達七歳の稚子に思ひを残しいまぞ惜むべき齢ひの八十年みざにたりし立去色つる朧月ばかり稚子が手習ひ事が草庵に来て彼に名附させんべきよしとのいふ玉戒へ筆の眼だけしるかいしこ戒れ一字を汲みて嵐戒と名く其悦びて顔色いま目のあたり残さるに生る時むつましからねをぶたなくてぞ人にハと思ひばなに値しく父の如く子のおもく手れ如く足の如く事にいひ別せむうひするもの労の意の従に結わぶ迷く枕を濡ねむうりえ筆をとうく思ひとのべむとれ不才ほくかくいいんとの小猶立ぐなく情ながしすぎきにかつせそ夕べの土になふのみ「秋風まよれく悲き家の秋

岡村不卜

岡村不卜ハ未詳の門人江戸堀江町に住みて一柳軒と号す
「魚座して痺いさハじ江代の巷「牝ぬ出く男ばかりの田
植かな「花ハ風にちられて道とも蠟菜元禄四年に死せり
此老なりしが續の原を著し其叙にいらせむとせ先の句乃聞
も俳諧の根を断よしといふ心なりし今續の原つぎをうし
此巻にハおもろくれ古き事ともあそせて哉稚独のふる紀友
ぶちの頭の俗ごしに判せて人ぞもなく行先舵も示しも
あとくハなりぬ云云その中に桜左持「桜ちる弥生八日ハ忘れ
まじ　其角右「そぼ降るや柳傘さして匠まちかね　不卜
素堂老人の判に左右ともに驚し生田の森本香そなわる
ばと古きも絨吟じて筆をとりたくなき　蝶掃左「いづくとも
行くあそバむ　蝶拂ひ峰白右勝「蝶ごうて告ハ兒でゐ紀紛

不卜　蕉翁判に当句滑稽の実を失ハじ感心見どころ侍
れど今んど此紀にいひし句のいきおひ強まさりて聞え侍
通バ勝とたん是古人歌合の掟になぞらひし其人の風流な
るべし

續俳家奇人談巻上終

6206
受入
36 3.14